

航空燃料の原料が家庭にも

廃食用油で空を飛ぶ！

世界的な需要を見越し 国産SAFの開発を促進

皆さまをお乗せした飛行機を目的地へ飛ばすために、欠かすことのできない航空燃料。その原料収集から生産、燃焼までの過程におけるCO₂排出量を、従来もの比べて約80%も削減できる持続可能な航空燃料「SAF」(Sustainable Aviation Fuel)に、いま世界中から熱い視線が注がれています。JALグループでも、SAFの自国生産を「オールジャパン」として取り組むべき重要な課題として捉え、民間有志団体「ACT FOR SKY」に参画。パートナー企業の皆さまと共に国産SAFの重要性について発信・啓発・意見交換を進め、開発促進に力を入れてきました。

化石燃料と異なるSAFは、何から作られているのでしょうか？ 原料となるのは、都市ごみ、農産物の食べられない部分、間伐材といった森林残渣、そして使用済み食用油など。つまり、最新の技術を活用すれば、私たちが天ぷらやエビ

フライを揚げるために家庭で使った食用油からも、SAFを作ることができるのです。

現在、家庭の廃食用油の多くは廃棄され、店舗などから回収された廃食用油も年間10万t以上が国外に輸出されているといわれています。ここに着目し、ACT FOR SKYを主導している日揮ホールディングスの下に有志が集まり、国産SAF製造へ向けた実践的な取り組みとして「FRY to FLY Project」を2023年4月に立ち上げました。航空会社として全日本空輸(ANA)とJALがこの活動に参加し、国内の廃食用油から作るSAFで飛行機を飛ばすことを共に目指します。

家庭のごみが燃料に？

資源循環型社会を目指して

6月に横浜で開催された「ジャパンバーガーチャンピオンシップ」では、このような空の脱炭素プロジェクトを多くの方に知っていただき、仲間を増やすため、FRY to FLY一同でブースを出店



横浜赤レンガ倉庫で行われたイベントにて。客室乗務員も参加し、SAFについて紹介しました。

イベントで出た廃食用油を回収し、来場されたお客さまへSAFの認知拡大を図りました。2025年に向けて、SAFの原料となる廃食用油の収集から生産、運搬、搭載までのサプライチェーンを整備し、国内での資源循環を確立するのがプロジェクトのゴールです。また、JALグループ内では社員食堂や寮、機内食を製造しているジャルロイヤルケータリングの工場から出る廃食用油を回収するルートの整備も順次進めています。

自治体や教育現場も巻き込みながら広がりを見せているFRY to FLYの活動を通じて、「将来的には、それぞれの地域においてSAFの原料を集め、SAFを製造・供給する地産地消モデルを離島を含む中小規模空港でも実現し、地域経済やエネルギー自給の観点でも貢献していきたい」と、日本航空やACT FOR SKY担当部長を務める喜多敦は力を込めます。

JALグループは国産SAFを通じた資源循環型社会の実現を目指し、各分野のパートナーと連携しながら、空の脱炭素プロジェクトを進めてまいります。

合計約230ℓの
廃食用油を
回収



広がっています！ ACT FOR SKYの輪

2022年3月、日揮ホールディングス、レボインターナショナル、ANAとJALが共同で設立。現在27社が参画し、国産SAFの商用化および普及・拡大に取り組む。



ACT FOR SKYについて
動画も発信中です(英語)



※2023年5月時点の
参画企業

▶「FRY to FLY Project」については、3ページの「ごあいさつ」でもご紹介しています。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

2015年9月、全国連加盟国(193カ国)により「持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals: SDGs)」が採択されました。2030年までに、貧困や気候変動、平和的な社会などの17の目標を達成すべく、JALグループも社会の課題解決に取り組んでいきます。



今回のテーマに該当する目標